広い農業／農家と非農家を結ぶ道

谷口吉光（秋田県立大学）

仕事柄、農業関係の会合に出かけることが多い。そういう会合では「農業情勢厳しき折」とか「農業は危機だ」という言葉が決まり文句のように使われ、参加者も深刻な顔をして話を聞いていることが多かった。「農業の集まりは暗くていやだな」と思ったものだ。

ところが、この数年、農業について明るく語れる雰囲気が生まれてきた。農産物直売所が繁盛している話、学校給食に地元の野菜を提供した話、子供たちが田んぼに来て農業体験をした話、都市の消費者と交流した話、田んぼでホタルを探した話、農家が民宿を開いた話など。そうした話題の大部分は農家と農家以外の人々（非農家住民）がさまざまな場面で出会い、交流を楽しんだという話だ。

これまで農業といえば「食料を生産する産業」と考えることが多かった。この意味の農業は生産性や効率を追求し続けてきた結果、ごく少数の専業農家（プロ農家）しかやれる人がいなくなりつつある。それ以外の農家（小規模の兼業農家など）は「競争力がない」とされ、産業としての農業から撤退せざるを得なくなっている。残されたプロ農家たちも、ますます厳しくなる海外の輸入農産物との競争のなかでどのくらいが生き残れるか不安を抱えている。

その一方で、農業を食料生産以外の活動と結びつけて、農業の範囲を広げようとする試みが急速に広がっている。それを「広い農業」と呼ぼう。たとえば、農業に教育を結びつけると「食育教育」「田んぼの学校」が生まれ、農業に医療を結びつけたら「園芸農法」が生まれるという具合だ。「食料生産の農業＋〇〇＝広い農業」と考えれば、〇〇のところに新しい活動を入れて自分なりの農業の形をいくらでも創り出すことができる。

「広い農業」には明るい話題が多いが、残念ながら、金が儲かる話はあまりない。それでも全国で「広い農業」の取り組みが広がっているのは、儲からなくてもみんながやりたくなるような「夢」「楽しさ」「おもしろさ」があるからだろう。それは日本人の生活があまりにも農業や土から離れてしまった反省として、農業が社会のなかで果たしている役割を多くの人々が見直し始めた結果だと思う。日本人は農業の大切さを思い出しつつあると言ってもいい。そこに日本農業の希望の芽がある。

「食料生産の農業」と「広い農業」が共存できる仕組みを作っていく必要がある。先日、アスパラを栽培している専業農家がこんな話をしてくれた。「この間、息子が通っている学校で給食に私のアスパラが出た。帰ってきた息子が『お父さん、今日の給食のアスパラ、お父さんのだよね』とうれしそうに言った。しばらくしてまた私のアスパラが給食に出た。息子は友だちに『これはうちの父さんが作ったアスパラだ』と自慢したらしい。私もうれしかった。農業をやってきてよかったと思った」。

学校給食に地元野菜を使うためにＪＡや学校の栄養士が苦労したという。そのおかげでできた「広い農業」の輪に子どもたちが入り、それがめぐりめぐって専業農家のお父さんを励ますことになった。農家と非農家が共に生きる道はこんなささやかな善意の上に作られるだろう。

（朝日新聞「あきた時評」　2004 年 6 月 19 日掲載分を加筆・修正した）